夢の中の妹は

夢野裏蜩

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分以外の家族が死んだ
それから早くも数週間
最近では何事にも興味をなくし
ふて寝を繰り返していたが
俺は、夢の中で死んだはずの妹に出会う
妹と話して、救われて、それなりに
生活リズムも戻ってきて
家族が死んでから２ヶ月がたった
今日も妹と夢の中で

目　次

夢の中の幸福 ―― 1
夢の中のカーレース ―― 13
夢の中の嫉妬 ―― 29
夢の中の疑問 ―― 44
夢の中の歪 ―― 51

夢の中の幸福

「……ちゃん……て!!」

声がした。

生暖かい泥の中に居るような感覚
くぐもってはいたが、確かに声がした

「…い……ちゃん……きて!!」

今度は、ハッキリと聞こえた

鈴を鳴らすような細く透き通った声が俺を呼ぶ

沈みかけた意識が、ゆっくりと浮上する
まるで、声の主に導かれるように
ゆっくりと目を開いｔ……

「起きてってば!!」

「ゴファ!?!?!」

みぞおちにドンっ!という衝撃と共に痛みがはしる
ベッドの上に寝転がって夢うつつだった俺は
ゆっくに目を開けるどころか
意識が一気に覚醒し、反射的に
目を大きく開けながら起き上がる。
というか、飛び上がるように上半身を起こす

「っおい、リン!!みぞおちは駄目だろ!」

「お兄ちゃんが起きないのが悪いんでしょ！」

リンと呼ばれた少女は
枕元で悪びれもせず、天真爛漫という
言葉がピッタリ当てはまるような
笑顔を見せている

リンというのは、まぁ、俺の義理の妹だ
俺が４歳の頃の親の再婚がキッカケで
兄妹になったのだ。
つい最近、１６歳になった
ちなみに、俺は１９になる

「そんなことよりもさ！お兄ちゃん！
はやく外の世界のこと教えてよ!!」

やはり、俺を殴り起こしたのは
話を聞きたいからか……
というか、俺の痛みを［そんなこと］だと？

「普通、謝るのが先じゃないですかねぇ？」

少しイラだった口調で言うが、
リンは我関せずというふうに
楽しそうに笑いながら
ポニーテールを揺らして
俺の話を待つ
なんか、尻尾みたいだな
あ、だからポニー「テール」なのか？

まぁ、なんにせよ良かったな、
俺が長門じゃなくて
長門だったら俺の痛みを知れとか言いつつ
みぞおちに肘鉄くらわしてたぞ
それをした所で変わらないし
妹は変に頑固で謝らないと思ったことは
絶対に謝らない

「……ハァ、なら、そうだな
今日の昼にあったことなんだけどよ」

妹を謝らせる事を諦めた俺は
大人しく妹が望むように、外の世界の
話を、面白いかもしれない話を始める
外の世界の話とは
どういうことかと言うと、リンは、
２ヶ月前に、親と共に死んでまった

俺だけが残されて１ヶ月後に
リンは俺の目の前に現れた
それも、自分を幽霊みたいなもの
になってしまったあげく、
俺の夢に住みついたと言った
それ以来、リンは見ることの出来ない
俺の起きている間の世界のことを
聞きたがるようになっていた

これは俺の予想だが、この妹は
リンは、俺の家族への執着心とかが
生み出してしまった夢の中の産物だと思ってる
というか、夢だと思ってる

あらかた話終えると
リンは、羨ましそうにこう言った

「フフ、今日はそんなことがあったんだね
私も見たいなぁ……お兄ちゃんの外の世界」

「やめとけ、やめとけ。
オクラにかける醤油を取ってくれって
友人に言ったらソース渡されて
それを気づきもしないでかけて
食べるはめになるぞ」

「それは気づけないお兄ちゃんが
悪いと思うな～」

「解る筈ねぇだろ。
ソースと醤油なんてパッと見たら
同じだからな」

話してるだけで怒りが再発しそうになる
あの友人ども、絶対に許さねぇ

すると、部屋のハト時計が鳴り出す
昔ながらの時計で、時間になると
ハトが出てきて鳴くアレだ
ハト時計の音を聞くや否や
リンは少し慌てたように
俺のベッドに入ってきて、俺に抱きつく

ハァ……俺の夢は妹をどうしたいんだ

リンは顔を俺の胸のところに押し付けて
ゆっくりと深呼吸してる。

ロングブレスダイエットでも
してんのか？って思うね

それに、かなりくすぐったいが
リンが可愛いのでしばらく
好きなようにさせておく

［可愛いは正義］

数分後に顔を離したリンは
かなり蕩けた顔で息を荒くしていた
麻薬でもやってると言ったら
信じてしまいそうだから怖い
でもまぁ、夢の中だからソレは無いが
取り敢えず、今に始まった事では無いのでスルー
いや、スルーしないと俺が襲いそうで怖い

「おにいひゃんの匂い、しゅごいよォ…♥」

おっと、甘くとろけた声はやめて？
襲っちゃうよ？
パパになっちゃうよ!?
やめて！ウルウルしてる
切なそうな目で俺を見ないで！
頬を紅く染めないで！
ムラムラします!!

「ねぇ、お兄ちゃん……好き」

「はいはい、俺もだよ」

何十回目だ?このやり取り

「……ムゥ、本気にしてないな」

頬をふくらまして
すねる妹。
いとおかし

「まぁな（笑）」

「……ハァ…あと、何分かな」

「さぁな、５分くらいだろ」

「……やだなぁ」
この夢の中でハト時計が鳴るのは
もうすぐ俺が、現実で起きる
ということを意味する。
当然、いつハト時計がなるのかは
俺たち２人にも解らない
いや、俺の夢なんだけどな
解らないんだよ。
皆もあるだろ??そういう夢
そして、妹は妹でハト時計が
鳴ると慌てて俺に抱きついたりする
なんでも、俺からパワーを
貰わないと夢の中に
居続けられなくなるから

しょうがなく抱きついたりしてる
らしいけど、この供給の方法
どうにかなんねぇのかな
嬉しいけどあやまちを犯しそうだわ
妹曰く、あやまちを犯すのは全然ＯＫ
むしろしてくれと言われたから
デコピンをおみまいした

リンが強く、強く、抱きしめてくる
少し苦しいが相手はふざけていない
今はつむじしか見えないが
いつだって、こんな時に顔を見れば
悲しそうな顔をしているのは
経験からわかっている。
これでも、兄だからな
リンの頭に手をポンッとのせて
優しく撫でてやる

「ッ!!…フへへへ、お兄ちゃんありがと」

「おう、気にすんな」

声音が明るくなったから
もう少しだけ続ける。
リンには、何時だって
笑っていて欲しいものだから
例えそれが、夢の中の偶像だとしても

そこまで考えると
頭がボンヤリとしてくる
呼吸が浅くなり

ベッドに再び仰向けの状態で倒れ込む

「お兄ちゃん！」

「……いや、こんじょうの別れじゃないんだから
それに、そんなに悲しそうな顔すんなよ」

「だって……」

「また来るよ、絶対
というか、ここ最近全部来てるだろ？」
そう、最近は全部妹の夢だ
リンはコクンと小さく
首を縦に振った。
納得している雰囲気ではなかったが
意識が沈んだり、浮上したりするのに
合わせるように、カクン…カクンと首が
下を向いたら慌てて前を向いて
また下を向いて慌てて前を向いて
を繰り返してしまう

「…お兄ちゃん」

「……ん？」

妹の話を聞いていたいから
起きてたいとは思うが
どうしても眠くてしょうがない

「…アッチじゃ言えないから
先に言っておくね？」

「………なん…だよ」

まずい、意識が…………………

「おはよ、お兄ちゃん！」

元気な妹の声を皮切りに
俺の意識は現実の世界へと浮上する
＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞☆
ピピピピピピピピと
スマホのアラームが爆音で響く中
俺は夢からさめる
スマホのアラームを解除しつつ
起き上がって背伸びをする。
夏場は暑いからすぐに起きれる
冬は寒すぎて布団から出られない
起き上がってスグに
階段を下って、和室に入る
そこに、仏壇の中で元気に笑う妹と
はにかむように笑う母
にこやかに笑う父が居る
こうして見ると、妹はの笑顔は
父親譲りなのだと改めて思った。
仏壇の前で正座をして
両手を合わせる
鈴と呼ばれる、あのチーンって鳴らす
鐘は鳴らさなくても良いと言われてる
昔は鳴らしていたが
最近、鈴の鳴らし方をネットで

調べてたら鳴らす必要はあまりない
と書いてあったのでそれ以降鳴らしていないない
家族に朝の挨拶をしたら
夢の中で妹にされた肘鉄を
報告しておく。

せめて天国で親父達に
説教をくらっちまえ！

挨拶と報告（チクリ）をすませると
朝飯の準備に取り掛かった

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞
＞＞＞＞＞♥
お兄ちゃんが消えた。
抱きついていたが、兄が消えたので
一瞬だけ兄の分身体が浮いて
ベッドに落ちる

「フギャッ!!」
変な声が出た。
こんな声、お兄ちゃんに
聞かせられないと思いながら
まだ、兄が居た温もりのある
ベッドに顔を少し擦り付ける
実際、兄からパワーなど貰っていない
ただ、抱きついて、匂いをかいで
頭を撫でられたりしたいだけ
嘘を言うのは心苦しいけど、
しょうがないもん。
お兄ちゃん鈍感だし

それにしても
……良かった

聞いた感じでは、仲の良い
女子は未だに居ないらしいから
なんで、こんなふうに
夢の中に居られるのかは解らない
いや。兄が起きてる間の
ここは何なのかも解らない
目が覚めたらここに居て
私は兄の夢の中に住んでいて
兄と会えるけれど
それは兄が寝てる間だけ
兄が寝た場所が
この兄と会える夢という
空間の背景になる
という事だけが、瞬時にわかった

兄が学校で眠れば
私の今いるこの兄の部屋が
学校の教室に変わるのだろう
病院で眠れば、今度は
病院になるのだろう
ちょっと興味はあるが
お兄ちゃんと会えるなら何処だって良い
好きで好きで好きで好きで好きで好きで
どうしようもなく愛しくてしょうがない
お兄ちゃんとまだまだ一緒に居られる
そう、これが、まだ一緒に居られる
ということが大事なのだ
例え、夢の中の偽物と思われても

そのうちお兄ちゃんなら気が付く
いや、気づかせる。
そして、受け止めてもらう
その事を考えてニヤつきながら
少しだけベッドに残った
兄の香りを吸いつつ
これからの兄が寝るまで暇になる時間を
空想の兄と遊ぶことで潰すことにした
もしも仮に、兄に恋を寄せたり
付き合い始めた女が居たら
多分、私は……

夢の中のカーレース

カチ…カチ…カチ…カチ…カチ…

部屋にハト時計の針が回る音が響くのを
聞きつつ私は、兄のベッドに横たわって
今までの事を考えていた。
いつもの事ながら
兄が起きていて本当に暇なのだ
だから、昔のことや兄との思い出
空想の兄とのじゃれあいで
暇な時間を潰している。
今日は、私が死ぬ時の事でも考えようか
私が事故にあって、死んでしまった
その、２ヶ月ほど前の出来事
あの頃の私の生活は
学校への登校手段はいつだって自転車だった
なぜなら、両親はいつも慌ただしく忙しくて
家族４人。父、母、兄、私が揃うのは
１ヶ月に１回あるか無いかだった
当然、そんなに忙しい親に
「学校に送って行ってくれ」
とは言えなかった。

そして、当然。忙しい親の代わりに
私の面倒を見るのは兄だった

いちいち勉強したか？とか
テストだったんだろ？とか
私の学校での事をよく聞きたがった
それに、自分は今日はこんな事をした

とか、聞いてもいないのに言ってくる
正直いって、かなりウザかった
1人にして欲しい時も
ゲームに集中してる時も
何時もそばに居た。
ウザいとか言ってキレたこともあった。
キレたり怒鳴ったりしたら
クラスの男子のように距離を置くと
そう考えたからだった。
結果は、何も変わらなかったが
そんなある日
親が二人とも仕事が一段落し、
私が帰る頃には迎えに来てくれることになった
友人達は何時も車だった。
そして、自転車登校の私を憐れんでいた
それが嫌だった。
今思えば、そのいらだちを
兄にぶつけていた所もあった。
しかし、今日は違う。
憐れに思われることもなければ
今までされなかった
車での迎えにワクワクした。
兄は部活が遅くなるというので
迎えは私とは別だ。
私だけの1人の後部座席。
楽しみだった。
帰りのホームルームが終わるやいなや
すぐさま教室を飛び出して
保護者用に作られた駐車場に走った。
ほどなくして親が車に乗ってやってきて
私は車に乗り込むと、つい、

テンションが上がって
「ついでにどこか、遊びに寄ろう！」
と言ってしまった。
たまにはと親も承諾してくれて
家とは逆方向のゲームセンターに
向かって車が発車する。
結果、コレが事故をよんでしまうとも
気が付かないままで
窓の外の風景を見ながら
父の話を聞いていた。
ゲームセンターに続く道の
十字路を通り過ぎようとした瞬間に
私の視界にトラックが
猛スピードで走ってくるのがうつった
父親の話をかき消すように叫んだ
「お父さん！トラック……!?」
叫んだ直後に鉄や車の部品が
ひしゃげて、捻れて、割れてきしんで、
砕けて、捻れて、凹んで
折れて、曲がって、
様々な悲鳴をあげたのが聞こえた。
直後に強い、強すぎるほどの衝撃
シートベルトが自分の逃げ場を消した
その後はあやふやだった。
視界が暗くなったり、
明るくなったりをただ繰り返した。
多分、座っている
身体がまるでいうことをきかない
それでも、頭は働いた
死ぬ

その2文字が、急に頭に浮かび
とてつもなく恐ろしく思った。
また、変えられない事実だと直感的に
理解してしまった。
それと同時に始まる、記憶の数々
自分の過去の考え、行動、思い、
全部が全部、見えて思えて感じれた
そして、最後に私の行き着いた感情は
死に対する恐怖でもなく
怯えでも、絶望でもなかった。
いつだってそばに居てくれて
私を気にかけてくれて、
私を見限って距離を置くこともしなかった
何時だって優しかった兄にたいする

恋だった。
それも、初恋

残り数十秒で消えてく命と
残り数十秒で産まれた恋心

嫌だった。

初めての恋が、残り数秒で終わるのも
優しくしてくれた兄に感謝を
きつくあたった自分の行動の謝罪も、
この初めての感情が言えないのも
そのために、助けを言えない喉も
走り出せない足も
シートベルトすら外せない腕も

どれもこれもが嫌だった。
どうしてなのだろう???

生まれて初めての感情が
どうして、こんな、数十秒で
誰の心にも残らない新聞の切れ端のような
そんなものになってしまうのだろう
お兄ちゃんは私を1人の女の人と
見てくれないまま
知らないまま
私が好きって事も解らないまま
他の女の人と仲良くなって
きっと、いつか、一緒に……

悔しさと嫉妬と悲しみ、絶望と怒り
様々な感情がいっぺんに襲ってくる
意識が遠のく

視界の黒い闇が、視界の中央に
向かって進んでいき
世界をせばめていく

嫌だ

嫌だよ

こんなの。あんまりだよ

私は、この気持ちを

私は、まだ、お兄ちゃんに

伝えてないのに、伝えたいのに

死にたくないよ

助けて

嫌

そして、気が付いたら
私はお兄ちゃんの夢の中に住んでいた
どうしてなのかは解らない
でも、そんなのは
実はどうでもいい。
今は、ただ、お兄ちゃんを
私のものにしたい
ちゃんと、女の人として見てもらって
愛されたい、好きだと言い合いたい

初恋なのだから、他の女にとられたくない

それが、今の、私の気持ち
＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞
＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞☆
「………よし、終わり！」
最後の荷物を押し入れにしまい
俺は約４時間にわたる掃除を
終わらせることに成功した
家族が死んでしまって１ヶ月の間は
あまりにショックで精神が不安定になり
物にあたってしまったり
掃除をやろうとしなかったりで
家の中の物が乱雑になってきていた
なので、今日は家の整理整頓をしていた
きっかけは、飯を食べたあとに
台所で洗い物をしつつ
部屋をざっと見渡すと
結構汚れていたからだ
だから、掃除を開始した
台所から見えるリビングの食卓
それと、その下の床
ただ、それだけのはずが、
いつの間にか家全体を掃除していた
掃除をしだしたら、
あっちも汚い、こっちも汚れてる
と次々に汚れを見つけてしまったからだろう

いつも思うのだが、掃除を始めると
かなり時間が早く進んでいくのは
一体何故なのだろうか？

何気なく時計を見たら3時間経過
していた時は、さすがに時計を
2度見したりしてしまう
さて、片付いて一安心しつつ
整理してる時に、出てきたなつかしい
ゲームのパッケージを見る
赤と緑の兄弟や、その他のキャラ達が
レーシングバトルをくりだすゲームだ。
マ●カと略されていて、俺も昔は妹と
よくこのマリ●で戦ったものだ

反射的に思い出が蘇る
容赦はしなかったこと
よく妹がボロボロに負かされて泣いたこと
そのせいで母に叱られたこと。

……せっかくだし、やろうかな
過去の哀愁を感じつつ
そのなつかしさに誘われて
リビングのテレビの隣で
大人しく使われるのを待つWｉ●の
電源を入れて、取り出しボタンを押す
たまに他のゲームのディスクが
入ってるのに次のディスクを入れようとして
失敗することがあるので、今は
事前に取り出しボタンを押した
無事、何も出てこなかったので
ディスクを入れる。
WＩ●リモコンの電源も入れて
１ｐの所にライトが着いたのを確認し
テレビにW●ｉリモコンを向けて

スタート画面を押すと、
今度はリモコンを横向きに持つ
こうして、深夜につい●リカ
を始めてしまうのだった

俺のルイー●は止められないぜ
＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

「……ちゃん………」

何処からか声がした
ちゃん？なんだそりゃ

「…いちゃん……て…！」

また、聞こえた
いちゃんて??
なんの呪文だ??

「お兄ちゃん！起きて!!」

「…ん??」

ゆっくりと目を開けると
俺はリビングのソファに横になって
眠ってしまっていた
妹からは、眠った場所が夢に反映される
と事前に聞かされていたのを思い出した

マリ●してるうちに寝ちまったのかな

恐らく、キリのいい悪いは解らないが
眠ってしまったんだろう
テレビの方を向くと電源は消えてるので
良いところで終わらせたのだろう
ツンツンと肩を指で突かれて
改めて前を見ると、
何故か最初から俺に抱きついている
夢の産物の妹、リンの顔がそこにあった

「……リン？なにしてんの？」

「今日はいつもより遅いから
ちょっとだけ早く抱きついてるの！」

妹が照れたように笑う
こちらも微笑み返して
優しく頭を撫でると、妹は
くすぐったくも嬉しそうに
目を閉じてニコニコしていた。

いつから、こんな顔しはじめたんだか

生きていた頃の妹とは違っていた
もっと、こう、ウザがられてた
やっぱり、夢なんだよなぁと
思わず再認識させられる。

「でも、珍しいね
お兄ちゃんがリビングで居眠りだなんて」

「ん？あぁ、ゲームしてたら
途中で眠っちまったんだよ」

「ゲームってなんの??」
「ほら、昔よくやっただろ??
マリオカー●だよ、W●iの」

妹は思い出したのか
ハッ!!とした顔になり
何度もうなづく。
「やったやった!!
お兄ちゃんがル●ージで
私が何時もピー●姫使ってた！」

相手の言葉に賛同しつつ首を
うんうんと、縦にふる
本当になつかしい
……というか、あれ??
ここ、リビングが反映されてるなら

急に気がついた可能性を確かめるために
俺はゆっくりと上半身を起きあがらせる
妹は頭にハテナマークを出しつつ
俺の動きの邪魔にならないよう
立ち上がってくれた。
こちらも立ち上がり、テレビの
リモコンを持って電源を付けてみる
考えた通り、マ●カの画面が映る
妹の顔を見て、テレビを指さしつつ
「やるか??」
「！うん!!!やる!!」
即答だった。

数分後には、キャラ選択だった
まぁ、俺はいつも通りのルイー●
妹も、いつも通りのピー●姫だった
後はステージを決める
ステージの特徴が画面に映し出され
最後に位置についた自分のキャラの
後ろ姿に画面が変更される
画面にカウントダウンの数字が出され
俺達は3秒後に走り出した。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

さて、ファイナルラップに
突入したは良いが、
俺は現在2位
妹が現在1位だ。
おかしい。
何故こんなに上手くなっている
「隠れて練習してたんだよ？
お兄ちゃんに勝ちたかったから」
心を見透かしたように妹は
そう言った。
勝ちたかった……か。
まぁ、あんなにボロボロに
負かされたら、流石に許せないわな

「とかなんとか言っても
最後に勝つのは俺なんだけどな」

見え透いてるだろうか？

だが、ハッタリも大切だ。

「もう負けないもん！」

「俺だって負けない！」

極限まで集中し、コーナーのギリギリを
曲がって妹に近づいていく

やっぱりお兄ちゃんだなぁ
とつぶやく声がした。
その嬉しそうな、満足そうな声に
つい意識がいってしまう
すると、ピ●チ姫の後ろに3個の
バナナの皮が現れて、置いていく
意識がそれたのと、急なバナナに
驚いて反応が遅れてしまい、
俺は見事にスリップした
この技は……！

「お兄ちゃん、昔こんなふうに
バナナ置いてたよね」
妹が楽しそうに笑う
そう、これは昔の俺の戦法。
大抵はコレで妹がスリップして
俺が勝っていたのだ
なつかしい。

が、妹には負けていて貰おう
スリップ状態から戻り走り出すと
俺は少し前にとっておいた
赤い亀の甲羅を投げる。
この甲羅は自動追尾で、妹は

これに弱いのを俺は知ってる
甲羅にぶつかった●ーチ姫がスリップする
その間に俺は距離を縮めつつ走る
妹もスグに復活し俺の隣を走る
「もう来たのか!?」
「だって、負けられない!」

後はテクニックの差だ
久しぶりなので、互いに少しミスをしつつ
ちゃんと相手の隣まで戻ってくる
残りの距離も、もう長くない
後ろには3位のドンキーコン●が
迫ってきている
後は直線、ハテナブロックと呼ばれる
アイテムが目の前で横一列になっている
ハテナブロックにつっこみ
アイテムをゲット。
互いに、一時的に速度の上がるアイテムだ
それが、3つ。
相手が使えばこちらも使う。
残り数百メートル。
ゴールは見えていた
が、ここでとんでもない
伏兵が現れる。

妹が加速し、俺も加速し終えた時
画面から、シューーーと
飛行機が空高く飛ぶような音が
迫ってきた。
急にWi●リモコンから警告の
ベルがなり始める。

画面下にそれがなんなのか
アイコンで表示される
青い甲羅に羽が生えたイラスト
これは、トップ殺しの甲羅だった
1位のキャラを爆破し、かなり
スリップの時間を長くする
さらに、タチが悪いのは、
1位の近くの奴も巻き込まれる事だ
俺は一応、1位だが
スピードを落として妹を1位にしようとする
青い甲羅が画面に入ってくるまでは
位置と順位が変われば青い甲羅を
回避することが出来る
しかし、当然、妹も同じように
スピードを落とした
シューーーという音が大きくなり
画面に現れる。
俺は妹になるべく近寄った
青い甲羅が空中で一回転し、
垂直に落ちてくる
妹はスピードをあげるが、
もう、遅い

妹は爆発に巻き込まれた

「あ!・もう、お兄ちゃん!?」

こちらを責めるような
口ぶりで妹が吠えるが
「誰だってそうする
俺もそうする」

と、冗談っぽく肩をすくめた

「うううぅ」
悔しそうにうめく妹。
可愛いとは思ったが
俺は残りのコースを走破した。

結果、
俺は3位
妹は4位だった
「お兄ちゃんが青甲羅の時に
近づいてこなきゃ勝ってたのにー！」
悔しそうに足をジタバタする妹だが
行動とは裏腹に、顔は嬉しそうで
とても満足気だった
「残念でした」
俺も多分、同じ顔をしてるんだろう
「じゃ、もっかい、するか？」
「うん!!まだ一緒に
お兄ちゃんとゲームしたい!!!」
妹はすぐさまうなづいた。
まだ遊びたいじゃなくて、
俺とゲームがしたいか。
くすぐったくも嬉しくなった
こうして、ハト時計が鳴くまで、
走っては勝って
走っては負けてを
繰り返しながら、俺は、
夢の妹と笑いあって過ごした。

夢の中の嫉妬

ダンダンダンダンダン!!!!!
～～～～～～～～♪♪♪♪♪♪

放課後の体育館から運動部の
慌ただしい騒音と
どこかの教室から聞こえてくる
器楽部の綺麗な音色が
赤く染まった校舎の中で響き
不協和音に変わる
そんな中俺は、昇降口の外で友人を待っていた
ちなみに、約束の時間から２０分過ぎている
おおよそだが、生徒会の仕事で
遅れているのだろう
現に次期生徒会長だし……
約束を忘れてるなんてことはない
俺が自暴自棄になっても
まるで諦めずに友達で居てくれた
そんな真面目な奴だ。
まぁ、遅いには遅いが
空を見上げて赤く染まった雲を見つめる
思えば、事故を知った日も
こんな日だった
あの頃は、今のように帰宅部ではなく
バドミントン部だった。
必死にシャトルを追いかけて
弾いて返して打って上げての繰り返し
それが楽しかったし、面白かった。
あの日が来るまでは

敵が、コートの端からこっちの端に
シャトルを上げてきた。
こちらも急いで下がりつつ
シャトルの落下地点に入る。
『っッッッ!!!!!!』
落ちてきたシャトルに合わせて
ラケットを少し弱めに振って
ネットの手前にシャトルを落とす
だが、相手はすぐにシャトルに追いつき
ネットギリギリで返してくる
相手がシャトルに追いつく間に
自分のコートの真ん中に
戻ってきていた俺は、返されたシャトルに
つめよって、今度は相手コートの
奥に向かって上げた。
ピピーーーーーーーーーーー!!!!!
それと同時に、コーチから
終了、または、停止の合図の笛が鳴らされる
もう終わりかな？
と時計を見てみると
部活時間も残り少ないが
まだ２０分程は時間が残ってる
何時もなら、止まらずに最後まで
続くはずなのだが……

気になってコーチの方を見ると
いつから体育館に居たのか
うちのクラスの担任がコーチの隣で

焦ったように話してる
うちの担任は卓球部の顧問の
筈だよな……なんで居んの??

疑問が頭に浮かぶと同時に
コーチに大声で呼ばれた
なんなんだと思って
歩き始めると、急げと怒鳴られた
何かとんでもない事をしたのかと
思ったが、別段、何かした覚えはない
あるとすれば、そう、
提出物を出さなかったことだ
まぁ、それでこんなに怒鳴られる
はずがないんだよなぁ
駆け足でコーチと担任の前に立つと
酷く青ざめて、焦ってるような顔に見えた
嫌な雰囲気と予感がした。

『亮太朗、落ち着いてよく聞け……』

気が付いたら、先生の車に乗っていた
確か、俺以外の家族が事故にあったと
聞かされた時に、車をだしてくれと
言ったんだと思う。
車に乗った後は、何度も何度も
時計を確認した
『そろそろだ』
先生が言うと同時に
病院が見え始めた。

病院の駐車場に入ると
車を入口のすぐ横に止めてくれた
先生の意図を察して車から
転がるように出て病院に入る
受け付けに怒鳴るように名前を言うと
家族がいる場所の部屋を言われた。
そこを目指して俺は走った。
後ろから走らないでください!!
という声が聞こえたが無視した
そして、たどり着いた。
ドアノブを乱暴に下げて
ドアを開く。
ソコに居たのは、いや、あったのは
白い布で隠された3人の人間

部屋を間違えたかもしれない
実は親や妹じゃないかもしれない
ドッキリかもしれない
様々なそうあって欲しい
想像で作られた現実が頭の中で回る。
不思議と足が前に出た。
横たわった3人に近づいていく
まるで、自分が自分を制御する事が
出来なくなったようだった
腕が伸びて3人のうち、妹と
思われる子の顔を隠す白い布を
ゆっくりと引き剥がす。

視界が歪んで揺らめく

涙が自然と出てきた。

手が震えた

どうしようもない絶望と悲しみが
理不尽に対する怒りが
塊となって口から出てきた

『……ぁ……ぁあ…………あぁあぁああああああああぁあぁぁぁぁぁ
あああああぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!』

その後の事は覚えてない
後から来た先生や医者、看護婦曰く
地面にうずくまって泣いていたそうだ

そこまで思い出すと
後ろから声がした。
「すまない、遅れてしまった」
聞きなれた声。
ハッキリしていて、ゆっくりとした

聞きやすい発音。
振り返ると、白い縁のメガネをつけて
大学生なのに制服をピチッと着た
次期生徒会長の真面目な友人
石田　　薫がそこに居た

「謝らなくていいよ、カオル
気にしてないし」
そういうと、相手が俺の隣に立ち
一瞥すると歩き出す。
急いで欲しいのと、
あまり公衆の面前で
口にしたくない話題が
ある時の合図だ
俺は薫の隣に駆け寄り、
相手のスピードに合わせて歩く

「さて、今回貴様を呼んだ理由は
分かっているよな??」

「……どうせ、また、漫画とかだろ?」
「その通りだ。」

そう、薫はアニメや
漫画が大好きだ。
自分の気に入ったアニメや
面白いと思った漫画を俺に教えては
貸してくれたりもするように
最近なってきていた
まれに、趣味を押し付けてすまない
とか言うけれど、実際暇だし

全然構わないのだ
「今回はこれだ」
相手がカバンの中から
ビニール袋を取り出して
中身を見せてくる
「えーーっと、これなのか？」
ビニール袋の中にあったのは
ＤＶＤのパッケージだ。
タイトルは
［白魔法少女！ラリルレ♥ロリナ］
だった。

「おいやめろ、亮太朗
俺をそんな目で見るんじゃない」
「いや、だって、さすがにこれ」
「馬鹿物!!見た目で判断するな!!
この作品がどれだけの
名作なのか知らんのか!?」
「いや、見たことないし…」

流石に女児アニメは見ない。
まぁ、昔は地獄少女とか
２人はプリキュアとか見てたけど
それも七　八歳くらいの時だ
あれ？年齢的に結構やばい??

「構わん！見ろ！そして、感想を
５００文字以内で述べろ!!
でなければ貴様を生徒総会で
死刑にしてやる!!」

「なんで、生徒総会で
死刑が存在するんだよ」
＞＞＞
＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞☆
あの後、ビニール袋を渡されて
それぞれの家に続く帰路について帰った
家に帰った後、俺は飯と風呂をすませて
テレビの前のソファに座っていた
俺の隣に置かれたビニール袋から
［ラリロリ］
（白魔法少女!・ラリルレ♥ロリナの略）
のＤＶＤを取り出して、第1巻の裏で
話の内容を確認する。
内容としては、いたって普通の
魔法少女を題材としたアニメのようだ
「見るか」

＞＞＞
＞＞＞＞＞＞＞＞＞
視聴をし始めて
数時間たった。

感動した
中身がとても濃く
主人公のロリナが記憶喪失に
なってからの仲間たちの支え合いが
とてつもなく感動した
次のＤＶＤを入れようとしたが
ふときになって時計を見てみた
既に短針が１１時をまわっていた
どうやら、あまりの名作ぶりに

時間すら忘れてしまっていたらしい
あと半分程残っているが
また明日の楽しみとして取っておこう
そう思い、俺は自室に戻るのも
面倒だと思い、ソファに倒れ込んで
寝るのだった

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞
＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

「…………お…ちゃ…」

気だるさと温もりの中で
声がした。
というか、え？お茶？

「お……に……ちゃ……!」

鬼茶??
よくわからない単語が
光のさす世界に俺の意識を
引っ張りあげて行った

「起きてよ!!!お兄ちゃん!!!」

なんだか、主人公が死んだ時に
ヒロインが言いそうなセリフで目が覚めた
枕元で膝立ちになって夢の産物の
妹、リンは俺を揺らして
起こしていたようだった

「おはよ!!お兄ちゃん！」

俺と視線が合うと、妹は
嬉しそうに笑いながら
そう言った。
「ん、おはよ」
寝起きだから元気に返せない
いや、起きていても、
元気でいる方法を忘れたのだから
妹のようにハツラツと言い返せない
「お兄ちゃん、今日も遅かったね」

少し妹の目が細まりながら
俺をジトッと見てきた
なんの事かよくわからないので
頭を傾げてわからないという
意志を表現してみると

「最近、私に会いに来るのが
だよ……！」

いじけたような口調でそういう
そして、相手のその言葉に
納得してしまった。
「確かに、遅くなったな」

ぼんやりと天井を眺めつつ
ポツリという。
いや、相手の目を見るのが
怖いだけかもしれない
「確かに、じゃないよ!!
ねえ、何してるの??

なんでこんなに遅いの???!」
「お前は母さんかよ」
昔は、遅く帰る度に
そう言われていたような気がした

「違う!!私は!
お兄ちゃんが何をしていたのかを
知りたいの!!!」

なんだか、ヒステリックに
言われてる気がした。
そして、自分のしていたことを
言う必要はないと思った

「別に?変なことは……」
「別にってなに!?」
「は、いや、」
「なんで?なんで答えてくれないの!?
お兄ちゃん!教えてよ!!」
妹が立ち上がって
ソファで寝転がる俺の顔を覗く
目に光が無いのは、
光源が真上にあるからだろうか?
にしても、俺の脳みそは妹をどうしたいんだ
と、夢を見せる脳に問いかけつつ
「わかった、わかったよ
説明するから、少し静かにしろ」

というと、妹は
また枕元で膝立ちになる
ソファに座り直して

相手の方をむく。

目に光は無かった
だが、膝立ちになったことを
聞く合図だと受け取った俺は
妹に大体の出来事を告げる
「まず、遅くなったのは
約束の時間に遅れた友達のせいだ。
アイツ、生徒会の次期生徒会長なんだよ
多分、それで俺もアイツも帰る時間が
大幅に遅れた。
まぁ、雑談しながら歩いたから
っていうのも一つの理由
んで、次に……」
と続けようとしたら、妹がさえぎった

「お兄ちゃん、そのオトモダチの名前は？」

「カオル」

「……続けて」

「？……とりあえず、
カオルは最近になってから
俺にＤＶＤとかを貸してくれるようになった」
俺はチラッと
枕代わりにしてしまっていた
ＤＶＤの入ったビニール袋を見た

「で、それぞれ家に帰って
俺は貸してもらったアニメを

見てたんだが、思いのほか面白くて
気が付いたら11時を過ぎてた」

と説明したは良いとして、
妹の目から光が消えていた
ひどく濁っていて、
よどんでいて、漆黒の目
「お兄ちゃん……」
初めて聞く声だった
いつもの鈴が鳴るような声じゃない
ドロドロと絡みつくような声だった
「なんで、ワタシ以外のオンナと
帰ったり、好きなものをキョウユウするの？」
妹はユラりと亡霊のように立ち上がる
「どうし……お兄ちゃん……私のもの
……じゃま……コロさないと」

ブツブツと呟きつつ
目の前で光のない目で
俺ではなく何処か虚空を見つめる
ような妹。それを見て、俺は
恐怖を覚えつつ、相手の間違いを訂正する
「あ、あのな、カオルは男だぞ」

「……コロ……え？」
妹の拍子抜けしたような声
キョトンとした顔と共に
目に光が戻ってくる
「お、男の人なの??」

「なんで俺に女の友達がいると思うんだよ」

「へ!?だ。だって、お兄ちゃん
面倒見とかいいし、顔も黙ってれば
カッコイイから」
「おい、黙ってればってなんだよ」
ジトッと、妹を見ると、目を逸らして
乾いた笑いを浮かべた
まったくと呟きつつため息をつく
「えへへ、そっか
そっかぁ……えへへ」

「………なんだよ」

ニヘラァと嬉しそうに笑う
妹が不可解で問いかけたが
「へぁ!?、な。なんでもない!!」
誤魔化された
「あっそ、で?
これ見る??貸してもらったアニメ」
枕代わりにしていたのはさておき、
妹にパッケージを見せる
微妙な顔をされた

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞
＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞
目が覚めると、朝の7時半だった。
微妙な顔をされた後、
アニメを見させると
とんでもなく食いつき
最終回では妹は泣いた
俺は泣きかけた。

最終回では、ロリナが
最愛の人とラスボスに挑み
無事、倒すのだが、
ロリナは最愛の人に
その思いを打ち明けることなく
死んでしまう
その時点で、妹は泣き怒っていた
俺は泣きかけたのは、
妹の泣き怒りに驚いたからだ
まぁ、所詮夢だから
この現実のアニメとは違う
結果なんだろうから、
こっちのアニメも楽しもう
とりあえず、スマホを取り出して
カオルに半分まで見たと伝える
とりあえず、朝食を作ろうと
俺は台所に立った

この日、家に帰ったら、
夢で見た内容と現実のアニメの
内容が、少しも違わずに
同じだったことに
この時の俺はまだ、気が付かない

夢の中の疑問

トントントンとリズミカルに
包丁がまな板の上で踊る
「フンフンフフーンフンフーン♪」
そこに妹の鼻歌が交じる
「嬉しいなぁ～♪
お兄ちゃんとお料理～～♪」
「手元見てないと切るぞ」

俺は今、妹と共に台所で料理をしている

「だって、嬉しいんだもん♪」
「はいはい、にんじん切ったら
次はジャガイモな」
「はーーい」
制作中なのはカレーだ。
まず、何故カレーを作るのかと言うと
帰ってから巻き起こった現象についてだ

昨日の晩、俺は友人からＤＶＤを借りた
夢の中で妹と視聴したまでは良かったが
夢の中で見た１０何巻分のＤＶＤの内容と
今日帰ってから見たＤＶＤの内容が
全く同じだったからだ

どうなってんだよ

と数十分間、困惑してある仮定に至った
夢の中の出来事と、現実の出来事が同期している
かもしれないという仮定だ

だとすれば、カレーを作り
1晩寝かせると美味しくなると言って
鍋の中にルーを残す
そして、俺が起きたら、鍋を確認
中にルーが入ってるから入ってないかで決める
確かめるのは怖いが、しょうがない

「お兄ちゃん、ジャガイモの次はー?」

「ん、あぁ、玉ねぎだ」

現実と夢は別だ
それは、覆されない摂理の筈だ
だが、もし、それが、ありもしない虚構なら
俺は…………

「痛っ!!!」
「ん?おい、どうし………
って、指切ってんじゃやねぇか!」
「だってぇ、玉ねぎで視界が滲んで
歪んじゃってぇ」
「何してんだよ」
俺は妹の怪我をした手を引きながら
台所の目の前にある食事用のテーブルと椅子に
妹を座らせた
＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞
＞＞＞＞＞＞♥

指を切ってしまった…
お兄ちゃんと料理が出来ると思ったら
ついつい、ぼーっと妄想してしまったせいだ
お兄ちゃんが慌ててる

フフ、可愛い♥

「ったく、大丈夫か？」
お兄ちゃんは、何時もより優しかった
手当の仕方がとても優しいし
何より、私だけを思ってくれてる

そう考えた時、胸の奥からお兄ちゃんに
対する愛情がわき、下腹部が熱を帯びた

お兄ちゃんが、お兄ちゃんが私だけを見て
私だけを思って、心配してくれてる
大好きなお兄ちゃんが、お兄ちゃんが

「…ォ……い、おい、大丈夫か？」
「ヒャゥ!?う、うん!!
大丈夫だよ!!」
呼ばれたことに気づくまで
全然、兄の声が聞こえてなかった

だ、ダメだよね、お兄ちゃんの声、言葉、
聞き逃したら
それにしても、お兄ちゃん。
すっごく優しい
フフフ、もっともっと怪我したら
もっともっと優しくしてくれるかな
＞＞＞

「ううん！大丈夫、大丈夫!!」
「なら良いけどな
　んじゃ、お前はもう休んでろ
　あとは俺が作る」

「へ??なんで？」

「なんでって、危ないからな。
　火とか使うし」

「な、なんで!?私、大丈夫だよ!?　」

「なんでそんなに必死なんだよ
　いいからそこに座ってろ」

「そん……な」
　なんでそんなに落ち込んでんだよ
　とは、聞けなかった

＞＞＞

「あ、お兄ちゃん」
「んー??」
「私、怪我したよね」
「したな」
「じゃぁさ、お兄ちゃん。
　私スプーン使えないから、アーンして？」
「今なんて??」

「アーン、して？」

「（。言。）アーン？」

「そのあーんじゃない！」

「なんでアーンしなきゃダメなんだよ」
「腕使えないから」

「お前が怪我したのは指……」
「お兄ちゃん、食べさせて??」
　有無を言わせないらしい
「わぁったよ、オラ。アーン」
「アーン♥ハグッ??”??”??”??”」
　物凄く嬉しそうに
　美味しそうに食べてる妹を見ると

　こちらも腹が減ってくる

「お兄ちゃん、アーン！」
「まだ続けるのかよ」

>>>

＞＞＞

夢の中の歪

少し強めの風の帰り道
空は異常な程にカンカン照り
「ハァ…」
それとは反して、ため息混じりに下校をする俺
ため息だって出るだろう？
夢の中での事が現実に起きるのだから
今日の朝に判明した事だ

友人から何十巻とＤＶＤを借りて
夢の中でそれを見て
確認したら
何十巻もあるＤＶＤの内容が
夢の中と同じで
妹と料理をしてみて
その時使った調理器具と

食べ残しが現実にあるなんて

今までの事を思えば、変な話だ

２ヶ月前、俺は俺以外の家族を失った

母、父、妹

泣くに泣いて、葬儀もろくに覚えていない

そんな中で、一ヶ月前に妹が夢の中に現れた

驚きもしたが、俺はその夢の妹に泣き縋り

そして、それから夢の中で妹と過した

……夢は、たまに昔見た夢を見ることはある

だが、こんなにも一ヶ月も連続で

同じような夢を見続けるなんてあるのか？

ありえない……筈だ

そして、何よりも、なぜ夢の出来事が

現実に反映されている？
夢の中で、偶然俺が死んでしまうば
俺も死ぬのか？
今まで、全ては俺の家の中での
出来事だ
それに、もしかしたら、あの妹は
亡霊か何かで、俺を殺して道ずれに……

「ッ!?」

『キャァ!!』

考え事をしていたせいか
見知らぬ女性とぶつかってしまった
しかも、最悪なことに
女性は自転車に乗っていた
俺は地面に尻もちを着いた

『す！すみません！大丈夫ですか!?』

「あ、はい！こちらこそ、すみません！
僕の不注意で！」
慌てて立ち上がり頭を下げる
相手は自転車から降りて
何度も頭を下げながら
慌てたようにポケットから
何かを取り出した
見たところハンカチだ
俺が疑問に思っていると
手のひらにソレを当ててきた
そこでようやく気づく
手から少し血が出ていた。
女性がすみませんと何度も謝るが
俺は気にしなくて良いですよと
面倒事を避けるのに必死だった

最終的には警察などもなく
先生への連絡もなくて済んだ
血が少し多めに流れるので
相手がどうしてもと言うのでハンカチを借り
傷口を抑えながら帰ることになった

>>>

まぁ、良い

夢の世界で妹に聞きたいこともある

そして、俺は夢の中へ沈んで行った

＞＞＞

「まぁな、色々あった」

「？」

コテンと首を傾げる妹

いつも見てきた。

これからも見続けると思ってた

「……なぁ」

「ん？なぁに？お兄ちゃん」

一呼吸。

たったそれだけでも

永遠に感じられる

「お前は、俺の妹なのか？」

♥♥♥

唐突すぎて、頭が回らなかった

「え？」

口から出た言葉は、戸惑い

「お前は本当に、石山凛なのか？」

なんで、そんな、こと、いうの？

「わ、たしは、お兄ちゃんの妹だよ？」

起き上がり、ソファに座り直す最愛の人に向けて、

私はそう言った

「本当にか？」

本当にって、ナニガ？

ナンデ、疑うの??

ワタシは、オニイチャンノ、妹だよ？

このアイは本物で
このオモイは紛れもないジジツで

「私は、だって……何時だって
お兄ちゃんを……私……」

頭が痛くなってきた

何故、こんなことを言われるのだろう

何故、大好きな人から、存在を
疑われてしまうのだろう

怖い……

兄に疑われるのが
私を私じゃないと思われるのが
思いが偽物だと思われるのが
存在を否定されるのが

今は、兄の一言一言が
どうしようもなく怖くなった
足から力が抜ける
兄の顔を見るのが怖くて
俯いてしまう
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
相手が、座り込んでしまった
カタカタと震えている
こんなに追い詰められるなんて
思ってもいなかった
なんだか、心苦しい
それでも、ハッキリさせなければ
「お前はなんで、俺の夢にいるんだ？」

相手はビクリと反応し、
自分の体を守るように自分を抱きしめる

「夢で起きたことが、現実でも起きてる
なぁ、何か知ってるんじゃないか？」

「シラ……イ」

小さな、極々小さな返事が来た
何かに怯えるように、相手は震える
クソ、埒が明かない

「俺の妹は、２ヶ月前に死んだ
死んだんだよ、お前は誰だ
なんで俺の夢の中にいる？
何が目的なんだ？
リンだったとして
俺を殺す気なのか？
それとも、お前は俺の夢の産物なのか？」

「「「「違う!!!!」」」」

今度は俺がビクリと反応する番だった

相手が立ちあがり、俺の肩を掴んで
顔を近づける
俺の目に映った妹の顔は…
その顔は、今にも泣きだしそうだった

「私は、ワタシは、お兄ちゃんの
妹なんだよ!!?
ずっと、お兄ちゃんが大好きで
ずっと、お兄ちゃんに憧れて
お兄ちゃんの1番近くにいて！
お兄ちゃんが朝に弱いことも！
ホラー番組を見たあとに
怖がる私を安心させるために
一緒に寝てくれたことも
小学生の頃テストの点数が
悪かった事も
全部全部、ちゃんと覚えてる！
なのに、なんで!?なんで
私の存在を疑うの!?
目的って何!?
私はお兄ちゃんと一緒がいいの！
ずっと一緒に居たいの!!
ねぇ、死んでも会いに来ちゃダメなの!?
大好きな人と、せめて、せめて
夢の中だけでもって、思っちゃ
ダメなの!?ねぇ、お兄ちゃん!!

私は、今も、昔も、これからも！
お兄ちゃんが大好きなの！
愛してるの!!
私は石山凛だよ!!
石山亮太郎の、1人の、たった1人の
妹だよ……」

声が出なかった

目尻に涙を浮かべながら

必死に叫ぶように訴える

妹の顔に、気圧されていた

「ねぇ、信じてよ、お兄ちゃん
私はお兄ちゃんが大好きなだけ
それ以外に何も無いの
幽霊でもなんでもいいよ
お兄ちゃんと居られるなら
私は!!!!!」

「わ、解った、落ち着け…」

何度も肩を揺さぶられながら

哀願されると、相手が嘘を

ついているようには見えなかった

その時、パサッと音がした
音のした方に顔を向けると
そこには、帰りに借りたハンカチがあった

それと同時に、妹の腕が止まった
妹を見ると、ハンカチを凝視して
動かなくなってる

???

「ねぇ、お兄ちゃん……」
静かな、とても静かな声
しかし、何か、良くないものが
含まれていた。
怒り？
違う
嫌悪？
違う

これは

「ねぇ、これってさ、お兄ちゃんの？」

「いや、ち、違う」

「誰の????」

「え？」

相手の目が、何処までも

何処までも虚ろになっていた

「お兄ちゃん、ねぇ、誰の????」

有無を言わさぬほどの圧

これは、殺意？

「ねぇ、お兄ちゃん？

お兄ちゃんはさ、なんでそんな風に

私を困らせるの??」

「は……？なに……言って」

「私はずっとお兄ちゃんを慕って

何されても構わないくらいに

愛してて、なのに、なんで他の

女がお兄ちゃんのそばに居るの？」

「ま、待て!!誤解だ！
今日の帰りに自転車と接触して
その時に怪我をしたから、
傷口を抑えるためにハンカチを
その人から借りただけだ！」

「怪我、したの？」

「そ、そうなんだ、だから、
そういうことじ」

「ふざけないで!!!!!
!!!!」

「!?」

「お兄ちゃんに怪我させるなんて
何処のクズなの？酷い。
優しくて頼りがいがあって
素っ気ないけど可愛いお兄ちゃんを
傷つけるなんて!!!」

「は？いや、」

ブツブツと親指を噛みながら

髪の毛をワシャワシャと乱暴に

ひっかく妹

なんだ、これ、なんで、こんな

「り……ん…」

俺の声は届いていなかったようだった

マズイ、逃げないと!!

俺は走り出そうとした

だが、ダメだった

「何処行くのぉ?お兄ちゃん?

私が一緒じゃなきゃ……ダメでしょう?」

足首を掴まれていた

だが、おかしい。

妹はどちらかと言えば

運動が苦手で握力も中の下だ

なのに、なんで俺の足が動かない?

恐怖で足が動かないわけじゃない

なんだ?ビクともしない!?

「お兄ちゃんは、外に出ちゃダメだよ？」

部屋が、俺たちの居る部屋の壁が

赤くなり始める

まるで、錆びていくように

「お兄ちゃんは私と一緒
ずっと一緒」

なんだ、何が起こって

「おやすみ、お兄ちゃん」

＞＞＞

いつもの白い壁だ

いや、いつものじゃないものがあった

現実を脳が受け入れない

身体が震え出す

視線の先にあった

たった一つの物が

現状を暗示していた

俺の部屋には無いはずの

鳩時計

その時、ドアが開いた

「お兄ちゃんおはよ」

にっこり笑いながら

妹が入ってくる
両手にはおぼんに乗せられた
匂いからしてカレーがあるようだ
だが、明らかに違うのが
「髪、どうした」
「んー？切ってみたの
お兄ちゃん、ショートも好き？」
「あ、あぁ」
妹の髪が短くなり
目のハイライトが消えている
「はい、ご飯。
いっぱい食べてね？」
「え、ぁ、……は？」
そこにあったのは
カレーではなかった
いや、カレーだったものだ

カレーの中に、細い黒いものが
蛆虫のように、蜘蛛の巣のように
張り巡らされるように存在していた
「何、こr……」
「カレーだよー？」
何を言ってるんだ
コイツは
「く、食えねぇよ、こんなの」
「は？」
妹の顔が歪む
見たことの無い表情
なんだ、何が、どうなってる？
「お兄ちゃん、食べなよ」
妹が無理やりスプーンでカレー（？）を
掬って差し出してくるが
俺は精一杯首を振る

食べれるはずが、ない
「……んで？」
「え？」
「なんで食べてくれないの!!」
「!?」
怒号が飛ぶと同時に
髪の毛を掴まれて、引っ張られる
反射的に引っ張られた方に体を寄せると
妹が口に無理やりスプーンを入れてきた
「食べて！お兄ちゃん!!!
食べなきゃ死んじゃう!!」
「やめ……ゥッ」
口の中にスプーンが入れられ
黒い細いものが口の中で絡まる
やはり、これは
「どう？私の髪の毛カレー

美味しい？美味しいよね？お兄ちゃん？」

くそ、やはりか！

「お兄ちゃん、返事は？」

「ゲホッ！ゴホッ！」

「1杯食べて？」

無理やり、無理やり、何度も何度も

口の中にスプーンが入れられ

無理やり飲み込めば喉に絡みつき

むせ返り、布団は汚れていく

「助け……」

「これからはこうやって

お世話してあげるねお兄ちゃん」